

ごくごく私的なアジア修行記

第十回生 碓 雄神

(天台沙門)

私が第十回横浜善光寺留学僧として、タイのワット・パクナム寺院に派遣して頂き、テラワータ(上座部)比丘として修行させて頂いたのは、一九九四年のことでした。

お寺とは縁のない在家から得度して、天台宗の僧侶になってからまだ日の浅い頃に、留学僧としてテラワータ仏教修行を体験できたことは、その後の私の僧侶としての姿勢に、深い影響を与えました。

諸先輩方のような日本での実績や研究の成果もない私は、タイにおいて、パーリ語の研鑽やパクナム寺独自のタンマカイ瞑想を実践するよりもまず、「トゥドン」(行脚・頭陀行)の名の下に、とにかく黄衣のまま、戒律の範囲内で、暇を見てはあちこち広く出かけることにしていました。

一体、ワット・パクナム寺院で修行されたご僧侶の皆さま方の内、どれくらいの方たちが、

私のようにタイの町々をうろろうろされたことだろうかと、時折考えることがあります。

タイの僧侶はバス代が要らないので、熱帯の日差しの中の昼下がり、午前の勤行や齋食が済んだら外に出て、近くを歩いたり、バスに乗ったり、他のお寺をお参りしたり、本屋に赴いて仏教書を探したり。

ある時はお寺での食事を取らず、外で正午を回らぬ内に食事をしたり、そしてそんな時には、やっぱり信仰篤い見知らぬタイの方が私の食事代をご供養して下さったりで、タイの僧侶が如何なる境涯において日々を送っているのかを如実に感じました。

そんなこんなのあるこれが、パリ語の研鑽や瞑想修行に勝るとも劣らぬ自分の血となり肉となった実感を、今も毎日、確実に反芻しながら日本でのご法務に当らせて頂いています。

日本のお寺の修行形態と違って、定められた範囲内なら最大限、個人がそれぞれに修行できるタイの寺院のシステムが心地良かったのは勿論ながら、横浜善光寺留学僧育英会が、そうした個人の自由を保証する形での修行を許して下さっていたからこそ、思うままにバンコクの街中を逍遙し、タイ各地のお寺を訪ね歩くことができたのだと思います。

或いはタイ国内のみならず、パクナム寺の住職と育英会理事長の許可を得た上で、インドネシアのポロブドゥールやカンボジアのアンコールワットの巡礼にも出かけさせて頂き、カンボ

ジアでは育英会の先輩僧である洪井師とのご縁でワット・ウナロム寺院にも止宿させて頂きました。

また、タイでの修行期間中には、当時から今日までずっと日本人上座部僧として修行を続け、現在のテラワワーダ仏教ブーム、瞑想ブームの一角を担っておられるプラユキ・ナラテボー師と知り合うことも出来ました。

「マインドフルネス」という言葉だけが独り歩きしている感がなくもない昨今、この言葉の基となったテラワワーダ仏教やヴィパッサナ瞑想の核心である「sati 気づき 念」について、当時からプラユキ師のご指導を受けることができ、今日に至るまで親交を頂いていることは、私にとって大きな喜びです。

そしてその後、私はタイでのテラワワーダ修行体験を大きな自信として、インドの仏跡ブツダガヤに位置する印度山日本寺に赴任し、またインドから帰国後は日本仏教界に身を置きつつも、常にアジアでの修行を基に、日本のこの法儀は本来どのような姿であったものが、形を変えて大乘仏教に受け継がれたのかと問い続け、最も良い形で自分の中に仏法を浸透させ、またそれを布教すべく心がけて今日に至ります。

そのささやかな結晶を、僭越ながら「ホームページ アジアのお坊さん」「ブログ アジア

のお坊さん「番外編」という形で細々と発信させても頂いていますが、さて、やっぱりその核にあるものは、留学僧として派遣して頂いた、タイ・パクナム寺での生活です。

第10回の留学僧として派遣して頂いたということは、ちょうど育英会の諸先達、諸先輩の皆さま方たちが、海外布教、海外修行、海外仏教留学の礎と道筋を、おおむね整えて下さった後でもあった訳ですが、今の様にインターネットによる情報もない時代に個人での海外修行は難しく、この時期にタイで修行させて頂いたのは、思えば本当に有難いご法縁ではありました。

謹んでここに改めて感謝し、さらに精進致したく思います。有難うございました。